

氏名(本籍)	佐野 淳 (鹿児島県)
学位の種類	博士(コーチング学)
学位記番号	博乙第2648号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	コツの言語表現の構造に関する発生運動学的研究
主査	筑波大学教授 博士(体育科学) 中川 昭
副査	筑波大学教授 博士(工学) 浅井 武
副査	筑波大学准教授 博士(体育科学) 関子 浩二
副査	筑波大学教授 教育学博士 清水 諭
副査	環太平洋大学教授 博士(体育科学) 朝岡 正雄

論文の内容の要旨

(研究目的)

本論の問題意識と着眼点の特徴は、コツについて学習者自身の語ることは、すなわち学習者の発する動感述語としての創発言語にはスポーツの技術を解明していく上できわめて重要な内容が含まれることに注目し、技術は学習者自身が自らのコツについて語ることは(創発言語)の分析を通して明らかにされるという考え方をもっているところにある。そして、このような考え方は、これまでにない創発言語の分析から技術解明をしていこうとする新しい技術分析法の構想へとつながっている。ただし、そうした技術分析法が提案されるためには、創発言語自体の表現構造が明らかにされる必要がある。

本論は、このような認識に基づいて、発生運動学の立場に立つとともに言語学的な視点も取り入れて、学習者のコツの言語表現時の表現の仕方やことばの使い方の構造を明らかにすることを目的としている。

(論の構成)

本論は、以下のⅢ部から構成されている。すなわち、言語表現の対象であるコツの問題性とコツの概念について検討した第Ⅰ部、そのコツの体験構造を明らかにしてコツと言語との関係を考察した第Ⅱ部、そしてそのコツの発話(言語表現)の構造を考察した第Ⅲ部である。なお、緒論においては、本論の研究の立場である発生運動学の学問としての発展経緯と方法論的特徴が述べられている。

本論のⅠ部からⅢ部において展開されている内容は以下の通りである。

第Ⅰ部では、“できる”ということが論の出発点となり、スポーツにおいてこの“できる”ということがどのような問題性をもつか、それがコツとどのような関係をもつかが考察されている。この“できる”ということは練習を通じてもたらされる学習者自身の運動の状態ないし現象である。この“できる”は能力表現の“できる”の意であり、本論では、この能力表現としての“できる”という状態や現象には努力性、洗練化志向性、不完全の完全/不安定の安定、パトス性といった本質的特性のあることが明らかにされた。また、この“できる”は以下のような性質のコツとの出会いを意味することが示された。すなわち、コツは“できる”ことに関わる運動感覚の意識現象あるいは運動感覚的意味核とみなされるものであり、主観的で

あると同時に普遍的であるような性質（カント、フッサール、ベルグソン）をもち、直観（ベルグソン）の中で絶対ゼロ点（フッサール）によってとらえられるもので、それはモナド的性質をもつ（「モナドコツ」（金子））。

第Ⅱ部では、このコツをわれわれはどのように体験して言語との関係を作っていくのが考察され、以下のことが明らかにされた。すなわち、精神医学者の安永の体験理論に基づけば、われわれが実際に運動を行う中でコツを取り上げる体験は常に＜私＞の側からの把握という構造（『パターン構造』）をもっていること、このコツの把握にはことばが関わらない前言語的な把握段階があること、そしてメーン・ド・ピランの4つの意識位相（affection、sensation、perception、aperception）の考え方にに基づけば、コツがどの意識位相で取り上げられているかによって、コツの表現の仕方にも違いが出てくるということである。

第Ⅲ部では、体験して獲得されたコツの発話の基本構造と言語表現の意味論的構造が明らかにされた。まず、体験したコツは最大限に省略され短縮された速記ことばである内言（ヴィゴツキー）を経由して発話（外言的表現）されること、コツが発話される時、コツは名詞や動詞、形容詞、副詞などの品詞によってその内容が構造化されること、国語学者の時枝の文法に基づけば、この構造化された発話文は「詞」と「辞」によって構成され、そのうち「辞」によって発話者のコツに対する考え方や価値づけが示されること、さらにコツ発話の表現は断片的であり、コツを説明しようとするとその内容は抽象化されること、コツはロゴス論理ではなくパトス論理で語られる、ということが明らかにされた。そして、このような発話構造を前提として、コツの言語表現の意味論的構造が考察され、動感を背景にした単語使用の構造（機能性、動感束縛性、意義素の変質性、虚構性）、言語表現に意味形態（語る人の考え方）が介在するという構造、コツの言語表現時には特殊なコーブラを使用した表現形式（弾性的な表現）が採用されるということが明らかにされた。

（結論）

本論では、学習者が自らのコツを言語表現（発話、外言的表現）するときには、実際に体験し直観した世界を表していることが強調され、その言語表現の意味論的構造が明らかにされたが、最後に、コツの言語表現（創発言語）の構造に関する本論は、ことばの分析から技術を解明する方法に道を拓くだけでなく、学習者に動きを発生させるという、現場における技術指導（促発指導）場面においてもきわめて重要な知見を提供するものであることが結論として強調された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

運動技能習得時のコツの問題は、経験的にはその重要性がよく知られているが、研究の組上にはこれまでほとんど上ることはなかった。本研究はこのような未開拓な問題に正面から取り組み、コツの言語表現構造を発生運動学の立場から論究したもので、先駆的研究として大きな意義を持つ。本研究はコツの研究に対して重要な理論的貢献をするだけでなく、技術分析や技術指導といった実践的問題に新たな地平を拓くものであり、コーチング学分野の学位論文に相応しい内容を有すると高く評価できる。今後は創発言語の分析による技術解明へと研究が発展することが期待される。

平成25年2月7日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。